

宇和島子ども食堂「ハッピースマイル」研修会

平成 30 年 12 月 17 日（月）13：30～15：30

宇和島市神田川原泰平寺

参加者：20～30 名ほど



自己紹介 講師 仙波 英徳

それぞれの地域でその地域の特色を生かしながら「子ども食堂」を開催すればいいと考えている。愛媛県子育て支援課の子ども食堂は今年から委員会が発足した。互いに情報交換をしながら地域と密着していけばいいと思っている。

星野ひろみさん（ハッピースマイル代表・泰平寺住職の奥様）

今年の 8 月発足、すでに 5 回目を終えた。きっかけは、中 1 の息子の友だちが不登校気味になった。たまに遊びに来る子だったが、母子家庭で、母親は一日仕事をして子どもの世話が出来づらい環境。本人は一日中パソコンかテレビゲームをしている。食事は、お菓子やジュース、カップラーメンですませていたようだ。身近なところでそのような問題が起きていることを知り、地域の民生委員や知人に呼びかけて、子ども食堂を開催することにした。

地域の民生委員の子どもたちへの把握と、貧困を表に出すと、貧困家庭だと言われたりするので、地域の子どもや独居のお年寄りをお呼びして、わいわいと賑やかにしている。お年寄りは楽しかったとスキップして帰ってくれる。スタッフは、主婦歴の料理が得意な人や管理栄養士、調理師等いるので助かっている。みんな必要とされて生き生きと活動してくれている。地域の人たちと交流できる大切な場所だと考えている。課題は、資金のこと。有志の寄付と愛ウエイブからの助成金 5 万円で賄っている。しかし、食材の費用や社協のボランティア保険の保険代のことなどがあってたいへん。アレルギー対応もできていない。

今後、アドバイス等をいただきながら、対応できる食堂にしていきたい。

愛媛フードバンクの難波江さんから、クリスマス会にはお菓子やジュースの提供していただいた。近隣の方からお米等もいただいている。

仙波：参加費は貰っているのか。

星野：子どもも大人も無料にしている。

仙波：実際の持ち出しは、

星野：1回1万円ほどの持ち出し。調味料はお供え物等で賄っている。食器は、お寺でお接待をしているので50くらいはある。足りないときは、スタッフにお願いして100くらいは揃う。

仙波：告知は

学校の児童クラブや民生委員さんに、お願いしている。あと土曜塾にも声をかけて。

仙波：第一土曜にする意味は。

星野：覚えやすいので。11時半から14時まで開催している。

仙波：エリア的には。

星野：主に、徒歩と自転車で。近くに保育園もあり、お寺ということもあって、いろんな校区の子が来ている。

仙波：今日来られた方は、みなさんスタッフの方？

星野：スタッフは7、8人である。以外はこれから立ち上げたいと思われている方とか、興味のあるかたとか。12月26日に第1回目をされるかたも。

仙波：同じような活動をしたいということですね。その方たちも運営は単独で、他の機関と連携はしていないのですか？

番城地区の方：公民館の貸館事業とする予定。経費が助かるので。私は、子育て支援を14、5年していた。社会福祉協議会から5万、歳末助け合いから3万、民生委員の流用として35000円、地域の人の寄付も。来年からは、赤い羽根共同募金で。

星野：もう一人立ち上げようとしている。

A：フードバンクさんをお願いしている。地域の社会福祉法人や畠等持っている方に、寄付をしてもらって、基礎がしっかりしてから立ち上げようかと思っている。自分の所では難しいが、お手伝いならできるかとも思う。

仙波：宇和島では、気運が高まっていると聞いているが。

灘波江：市内でもう1件、介護施設されている方がされる予定。東予では今止まっている状態だが南予では盛り上がっている。

B：資金の問題。ずっと続けていくのが難しい。

仙波：気に留めておいて欲しいのは、始めたら大人の都合でやめるわけにはいけない。せっかく信用した地域にうらぎられたという子どもの気持ちを作ってはいけない。運営資金計画ができて、恒久的にできることを考えてからしなくてはいけない。行政がすると、いろいろ制約があって難しくなる。小さくても民間発でしたほうがいい。やってみる価値はある。

これから、久米地区はどのような経緯でやっていったか、パワーポイントやテレビで放映されたものを観ながら説明する。

・今年の全国社会福祉協議会研修で説明した内容。

・久米ふれあい食堂の取組～平成17年度の子どもチャレンジ支援機構における通学合宿よりヒントをもらう。

食に関する意識調査。最近の子どもの好みの多様化。8.7%ほどが、夕食を一人で食べている。好きなものしか食べない、栄養が偏りがち、濃い味を好むという結果がある。一緒に食べる人がいないので、隣の人と食事のスピードを合わせることが少ない。しかし、この問題は、高齢者も一緒、独居老人が増えた。

・28年に、解決策としてふれあい食堂をすることにした。チラシを配る。集会所と公民館でボランティアを募集。寄付もお願いした。出荷できない野菜をもってきてくださる農家の方、学習支援をするよと元教員の方、婦人会や主婦のボランティアが料理を引き受けてくださった。

・企画している時に、貧困対策の視点からNHKが報道した。それとは、違う形でしたかったので、名前を考えた。久米地区の子どもが来るのだからと、久米中学校にお願いすると、生徒会が動いてくれて、全校生徒に食堂の名前募集を投げかけてくれた。生徒が考えた食堂名「ふれあい食堂」となった。28年7月14日から毎週木曜日に開催。保健所は、食堂であれば制限をさせてもらわないといけないといわれたが、料理教室ということであれば、何の制限もないということであったので、対外的には料理教室となっている。そのかわり、参加者の人には、どこかの箇所でお手伝いをしてもらうことにしている。

・テレビ紹介。

お年寄りの言葉「しあわせな日やなあ、お祭りみたいで」。久米地区には、300人余りの独居老人がいる。回覧板等でふれあい食堂を知ったお年寄りがやってきて、子どもたちと一緒に食事をする。調理は、地元企業のクロスサービス、婦人会、学生。一人でも寂しい思いをしないように心掛けている。小さなボランティアが集まれば食堂がオープンできる。1回目は30名、3か月目では50名。50名越えると、配膳も大変になるので、配膳ボランティアに中学生を出してくれと中学校へお願いに行った。中学生ボランティアを募ったところ80人、多すぎるので10人前後にしてほしいといった。先着10名ほど。毎週金曜日の昼休みの校内放送で募集してくれている。城南高校の調理科の学生も来るようになった。調理科は料理に必要なスキルを学校で教えるが料理そのものは作らないという。東雲大学の食物科の学生も来るが、カロリー計算はしているが料理はしていない。学生たちは自分たちが作った料理をおいしいと食べてくれるので楽しんでしているようだ。

・100回達したときに、記念シンポをした。90名参加。地域でこのような形で「共食」の場を広げたい。自分の家でも、集会所とか公民館を利用してでもできる、また、ハッピースマイルのようにお寺でもできると思う。久米中学校生徒はふれあい食堂の手伝いに行くのが楽しみだと言ってくれる。

・2年後、1.6%に孤食率ダウン。共食率4.6%アップした。寄付は、愛媛銀行、赤い羽根、個人の有志、アサヒ飲料、愛媛県、食材地域の方々、さむらい（地域の居酒屋）、調理は、婦人団体、久米中、城南高校、東雲大学、地域有志、クロスサービス
アレルギーチェックは受付でしている。学習ボランティアは、教員OB、地域有志、愛媛大学学生
いろんな形で、ここにボランティアにきているという意識を伝えていかないと、継続的な参加につながらない。小さな子供から老人まで一堂に会する食堂がいい。

食堂は、全国2286か所立ち上がったが、はじまって短期間で終わるところも多い。立ち上げ資金はそれほどかからない。4〜5人で始められる。する側の自己満足もある。運転資金確保をどうするか、仕組みをどのようにするか、そのことをよく考えないと続かない。人はスタッフの意識の問題。金は計画を立てて、

場所は、普段からいろいろな人が集まるところで。告知・連携は、事業推進体制の確立。他の機関との連携。仕組みづくりから一緒に考える。保険・保健の加入は、安心して過ごせる場所として必須。

・貧困問題については、社会的貧困と文化的な貧困があり、困難な課題も多いが、それらを含め「子ども食堂」は不登校やいじめの改善の機会ともなるだろう。人とかがわっていけるような社会としていきたい。食堂は、横軸を対象者、縦軸をビジョンにして考えると、ケア食堂と共生食堂となる。久米地区で行っているのは共生食堂だが、どのような食堂を作っていくのか、スタッフの目標を練り合わせていかななくてはいけない。交流を促進するものか、課題解決のものか、オープンにしていくものか、クローズしていくものか。どのような食堂にするか、もう一度議論してほしい。

質疑応答

番城地区民生委員の方：番城の立ち上げは、必要とする子を受け入れたかった。しかし、難しい。それで、児童クラブの子どもたちを対象とした。中には、お迎えに来てもらえない子どもや気になる子ども数人いる。混ぜ込んでやっていきたいと思っている。共生の心でやっていきたいという気持ちもある。

仙波：入り口は共生の方が入りやすい。久米小学校で困難の子が、1学年に10名もいる。ほとんどがネグレクト。10人だけに声をかけるわけにはいけない。みんながいったのしいという情報が伝われば、その子も行かかもしれない。子どもが子どもを誘うという形をとってほしいと思う。

C：ホームページに親のアンケートがあった。言いたい放題。バッシングを受けるのではと思う気持ちもある。開催することは伝えている。

仙波：何曜日がいいかは学校に相談に行った。食堂の実行委員に校長先生が入っている。子どもたちの課題は学校が一番よく知っているので、地域の人々がどれだけ本気で話せるか、それが問題。

番城地区民生委員：コアが民生委員、日常の活動の中でどう救うか、ケア付きで、クローズの関係でと思っていたが、狙い撃ちはできない。楽しかった、また来てみたいという仕掛けが必要だと思った。テレビを見て、欲張りすぎていると思った。

仙波：極端に言うと、5.6人の子供のために、家庭でもいい。どちらが、目の前の子どもに必要かと考えればいい。

番城地区民生委員：広く浅く、とりあえずは、そこから始める。

D：5回目終わって、番城は、番城の子どもたちだけだが、わたしたちは、宇和島市全員、しかもお母さんと一緒である。明倫地区の会計から出すのもどうかと思っている。地域的になるのでおかしい。資金はどうすればいいか。

仙波：子どもと現場優先。大人の勝手な都合で地区を分けている。3つの地区の共同運営ということも考えることができるのではないかな。

E：資金集めが大変だけど、何とかめどがつけば、公民館に協賛してもらえばいいと思っている。今は、泰平寺さんに甘えているが、後々は、資金のためにあちこち声を掛けていきたい。実績を積み上げれば、行政も認めてくれるかと思っている。

仙波：今のところ、スタッフが多いので、一人一人が出し合ってもいいのかも。

F：スタッフもお金を出さないといけないかもしれない。根底にはケアのケースをやりたいという思いがあったが、

来るものは拒まずと和尚さんが言われる。なので、いつも、人数を決めていない。できるだけ、たっぷりつくて、足りてよかったなと思っている。

献立は、管理栄養士、多くても少なくともいけるものを臨機応変に作っている。天気か雨かということで献立が変わることもある。人数が多いなというときは、慌ててたすとか、簡単な丼物に変えとか。人数の把握の仕方はどうしているのか。

仙波：木曜日が当日なので、火曜日の午前中に締め切る。締め切りの数+3食用意する。経験値的にそのようなもの。アレルギー対策は、当日になって実はアレルギーですと言われても困るので、初回は書面をお願いしている。栄養バランスを管理栄養士に考えてもらい、大人を対象にカロリー計算をしてもらっている。衛生管理面は、当日調理室に入る人は全員、自分の健康及び家族の健康管理等チェック表に記入してもらっている。

G：毎回毎回のチェックはしていなかったなのでその方法でもいいのかもかもしれない。

仙波：ボランティアの意識づけにもなる。野菜の洗い方ひとつ、個々の家庭の風習と違うのでバトルになる。

星野：2月に勉強会をする予定。難波江さん主催。宇和島で管理栄養士との話し合い、事故があったからでは遅い。勉強会が必要である。立ち上げている5件のうち、2件は仲良しグループで管理栄養士がいない。クロスサービスは、どのような会社か。

仙波：クロスサービスは学校給食をしている企業。久米・新玉等の市からの委託で行っている。事前研修会をして、野菜の洗い方や手の洗い方などをきちんと教えてもらっている。善意で始めたことが、つまらない事故で足を引っ張られることがないようにしなくてはいけない。

難波江：資金面のこと、食材は、フードドライブ（家庭で余っている食料をもってきていただく）という方法もある。活用すればいい。キッチンペーパーなど食材ではないものの寄付もある。ついでに募金もお願いしたい。

難波江：災害の時の時の備蓄、入れ替え時に賞味期限前のものをもらう。住友さんから40トンあるからどうぞと頂いた。愛媛県内の社協に配った。企業に声掛けをしている。あまりおいしいものはないが。

仙波：地元を大切にしたい。しかし、季節ものなので同じ露地ものがいっぱいにくるので困ることもある。

難波江：フジが入っていると聞いた。どうやって。

せん：地域貢献として、参加したいということで。調理ボランティアとしてきている。食材を提供してくれるわけではない。サンプル品はもってきてくれるが、品物はくれない。

難波江：なかなか難しい。

H：ケア型、共生型と決めなくても、予防接種でも混合型がある。今回ケア型の子が来るときは心を込めて。また、ご高齢の方が来る場合は、共生型。両用で。そのような思いです。優秀なスタッフがいるので、私は、隙間がみえる部分での参加。多くの方が幸せな方向にむかっていけばいいと思う。実践的なお話もしていただいた。子どもからおじいちゃんまでの幸せが継続するように。孤独ではあるが、孤立は防ぐ。小さな気付きを見逃さないよう、積み重ねていく。

I：スタッフには妙齢の男性おり、折に触れ子どもに話しかけてくれるのでいい。

仙波：地域家族という意識でいい。それが食堂のいいところ。地域の中で役割がある。正解はない。やっているスタッフが増えるということで地域が活性化する。

J：参加をさせていただいてよかった。地域の人がんばってきてくれる。やれることつなげていきたい。

番城地区民生員：男の料理教室の方々からも手伝おうかとお話が合った。それなりにバラエティがある。

アレルギーの子が飛び込みで来た場合。どう対応したらいいか。面白そうだからきたというのでは、

仙波：事前アンケートをとる。初めて申し込んだ子には、学校に問い合わせをする。親は連絡がつきにくいので、直接学校に連絡した方がいい。ぎりぎりに申し込んでくるので、親に連絡を取ってだと間に合わない。飛び込みでアレルギーがある子が来た場合は断る。また、高齢者が残ったおかずをパックに詰めて帰っていかと言われることもあるが、衛生面を考えてそれも断っている。

H：そのような方が、納得しない場合は負の心が入っている。フォローする人が必要。納得のシグナル、キャッチボールをしなくてはいけない。傲慢を生む。食べれないという子がいても、栄養士さんが立ち回ってくれるから安心している。

K：子どもにアレルギーの自覚がある子が増えてきている。守秘義務とか、学校はすぐ教えてくれるものかどうか。

仙波：信頼関係の問題。学校と信頼関係を構築していかなくてはいけない。最後にあるおばあちゃんの言葉「子どもの声を聞きながら食事が出る事がもう一度私の人生になるとは思わなかった」胸に迫るものがあつた。子どもの言葉「ここでは嫌いなものも全部食べないといけないと思う。おばあちゃんが励ましてくれるから食べれる」